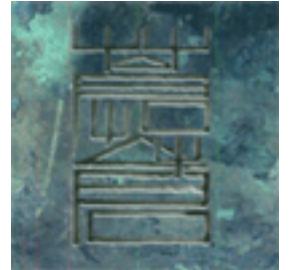




縄文巨大石棒の謎（第19回）

電子礫・蒼蒼



（2021年8月20日掲載）

中村公省（東京都町田市在住）

精霊とは何者か？

——アニミズムに関するノート——

はじめに

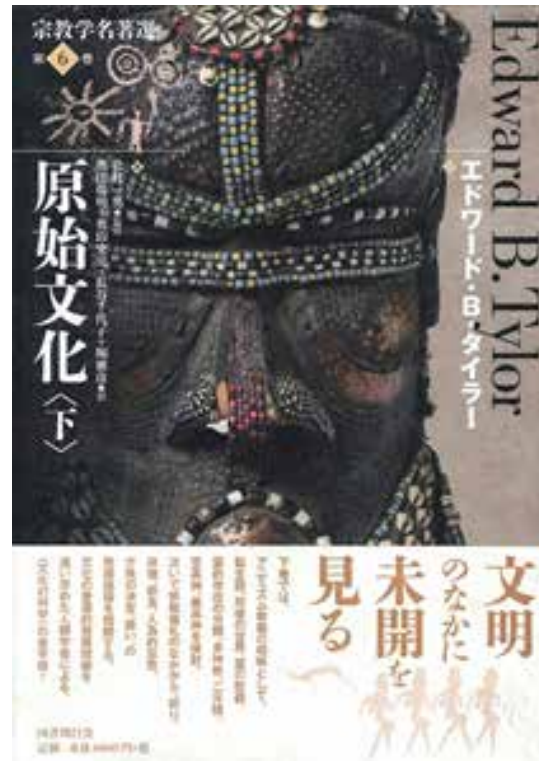
- （1）アニミズムとスピリチュアリズム
- （2）低級種族は、どのようにしてアニミズムを発見したのか？
- （3）呪術師の仕事は失われた魂を呼び戻すことである
- （4）殉死——妻や従者などを犠牲として捧げ魂をあの世に送る
- （5）動物、植物、モノにも魂がある
- （6）疾病の原因としての悪霊の憑依
- （7）霊の実体化としての偶像崇拜
- （8）霊的存在——小精霊、妖精、地霊、幽霊、祖霊、守護霊、悪魔、神々
- （9）アニミズムとシャーマニズム
- （10）シャーマニズムとして復権するアニミズム
- （11）折口信夫が考え抜いた精霊と神

精霊とは何者か？

—アニミズムに関するノート—

はじめに

エドワード・B・タイラー著『原始文化』の新訳が刊行されました（松村一男監修 奥山倫明・奥山史亮・長谷川千代子・堀雅彦訳、上巻 611 頁、下巻 626 頁、2019.3、国書刊行会刊）。旧来の訳書（比屋根安定訳、1962.11、誠信書房）は抄訳であって、全訳は初めて。上巻 626 頁、下巻 626 頁というボリュームです。



『原始文化』(Primitive Culture) は、1871 年に英国の人類学者エドワード・バーネット・タイラー (1832-1917) により書かれた著作で、宗教の起源であるアニミズムの研究書として、あまりにも有名です。この書がこれまで、全訳が無かったことは意外ですが、その理由は簡単で、大冊であって訳業も出版も容易ではなかったかららしい (比屋根安定説)。日本訳までに実に 150 年間、新訳訳者と出版社の労が、いかばかりであったか、その労を讃えたい。

私は、さきに第 18 回論考において、アニミズムに言及して、このタイラーの『原始文化』を、抄訳ではなく全訳で読む必要を痛感してきました。縄文の精神世界はアニミズムの満ち満ちた世界であり、精霊の生態を知らずには一歩たりとも解き明かすことが不可能です。しかし、この「精霊」というのが、目に見えない、姿・形がなく、電子顕微鏡でも捉え難い。そうしたものがいるらしい、しかも霊的存在への信念だという。単なる霊的存在への信念が、人類の歴史を動かしたというわけであって、物証信奉主義の縄文考古学も恐れおののかずにはおれません。何はともあれ、アニミズムに関するノートを取ることにします。

(1) アニミズムとスピリチュアリズム

◆宗教の最小限の定義と精霊崇拜

タイラーは、アニミズムを考察するに際し、宗教について、最小限の定義をしています。

曰く、「宗教の最小限の定義は、諸々の霊的存在への信念である」(上 p.518)。

そして、参照した膨大な量の証拠に基づいて判断する限り、「すべての低級種族について、霊的存在への信念があるらしい」、「今日では宗教のない民族は存在しない」と断じています(上 p.519)

「低級種族」とは、文化は低級から高級に進化するという進化論的な、19世紀英国の精神を反映しています。「総じて野蛮人の能力は最も低く、未開の人々は貧弱で、教育の行き届いた現代の諸民族が最も高い」(上 p.38)。この野蛮—未開—文明という道筋を通して人類の文化は発展してきたと見ているのです。

アニミズムは一般の解釈では、低級な原始文化に特有な宗教的な形態と理解されているようです。そこから、のちに高級な多神教や一神教という宗教が次第に進歩を遂げてきたのだと解釈されています。アニミズムは低級で、原始的で、宗教というには未成熟で、キリスト教、イスラム教や仏教が高級で近代的、現代的な一大宗教である。このようなアニミズムの理解はタイラーを誤解しているのではないかと思います。

「アニミズムは野蛮人から文明人にいたる人類の歩みにおける〈宗教哲学〉の土台なのである」「根っこさえあれば、枝は生えてくるものだから」とタイラーはあっさり言い抜けています。

タイラーには、残存という考え方があるのです。人類の文明の中にも、その文化が経過してきた野蛮、低級、未開の状態にあった時の文化を「残存」させているという。「諸々の霊的存在への信念」が宗教なら、アニミズムもそのひとつ。キリスト教、イスラム教や仏教などの大宗教も、間違いなく、野蛮、低級、未開の状態の宗教の原始的形態を残存させています。キリスト教などの大宗教も宗教、アニミズムも「諸々の霊的存在への信念」であって、未熟ではあるが、一人前の宗教でしょう。アニミズムは宗教の根っこ。アニミズムは宗教の起源であるだけでなく、宗教そのものでもあると見られています。そこで、仮に、アニミズムという未熟な宗教が存在した、さらに絞り込んで、縄文アニミズムという宗教が存在したと仮定しておくことも許されるのではないのでしょうか。

ところで、宗教の定義の対極には唯物論哲学の思潮があります。「神は存在しない」「宗教を信じない」とする唯物論哲学が19世紀には急激に台頭しています。タイラーは、〈唯物論哲学〉の対極にある〈心霊主義哲学〉の本質を具現する教理を、アニミズムの名のもとに考察しようとしていたのです(上 p.520)。

一般論として、「神は存在しない」「宗教を信じない」とする同時代の唯物論哲学信奉者にとっては、アニミズムの詮索は無用でしょう。しかし、「すべての低級種族について、霊的存在への信念がある」人類の歴史を探求する歴史探求者にとっては、この探求は必要不可欠です。何故なら、縄文人には霊的存在への信念があり、宗教なくして縄文人は生きられなかったからです。仮に貴方が唯物論哲学を信奉する考古学者であるとしても、それは現代に生きる貴方の問題であって、貴方が研究対象とする縄文人の生きざまとは関りないことです。

では、縄文人の霊的存在への信念を探求するには、どうしたらいいのか？

宗教そのものは掘り出されることがない。精神的産物ですから、考古学は対象とし得ない。しかし、宗教祭祀に使用されたと思われるモノは掘り出されます。日本の縄文研究においては、いわゆる「第二の道具」です。「第一の道具」は生業生活において直接役立つもので、弓矢、石斧、

石皿など。これに対して「第二の道具」は土偶、岩偶、土面、土版、石版、三角形土製品、石剣など。現代人には使い道が分からないが、儀礼・呪術に関わった儀器・呪術具として使われたであろうと推測されるばかりで、「何らかの祭祀」に使われたとうそぶくのが精一杯です。考古学の大多数は唯物論哲学の信奉者でしょう。

考古学者で、「第一の道具」「第二の道具」の提唱者である小林達雄（國學院大學名誉教授）は土偶について言っています。

「縄文人が表現しようとしたのは、姿カタチを見ることができず、気配で存在を感知するしかないドグウと名付けた精霊であったのだ。」「そもそも土偶は、縄文人が己が身を写したのではなく、ましてや女、男のいずれかに加担するものではない。改めて精霊ドグウの仮の姿だった原点に思い至るのである。」（『縄文土偶の誕生、そして大変身』『土偶・コスモス』pp.222-223、2012.9、鳥羽書店）

「第二の道具」を「何らかの祭祀」に使われたとして棚上げにしておくのではなく、その使い方を考えようとしたら、「低級種族の霊的存在への信念」を詮索しなければなりません。その詮索方法は、近代文明の波及しなかった、あるいは波及が滞った未開社会の人々、いわゆる低級種族の縄文人、弥生人などが、いかなる宗教、信念大系、カミを信じているかを観察し、証言を求め、探求する以外にありません。それは、絶対に掘り出されることがなく、掘り出されたものによってのみ考証するという考古学の対象外にあります。精霊を探求するのは、民俗学（フォークロア）、民俗学（エスノロジー）、文化人類学、歴史学、心理学をはじめとする精神領域を対象とする学問ということになります。

タイラーは、「安楽椅子の人類学者」と言われていますが、大航海時代を経て、世界の未開社会（低級種族の社会）に分け入った先進社会（高級種族の社会）の探検家、旅行者、宗教家、商人などの膨大な報告・証言を漁って、それらの中に宗教に関連する事実を発見しています。主要な報告・証言の類は19世紀の大英帝国主義の産物で、それらの報告・証言の中に野蛮、低級、未開の宗教の原始的形態を見出しています。しかし、高級な多神教や一神教という同時代現存宗教については、はっきりした輪郭を描くことができますが、野蛮、低級、未開の宗教については、高級同時代現存宗教の一部分、断片、変型、原型、残存形態と思しきものを渉猟して発見するか、他には見られない独自、新奇な原始的形態を発見していくしかありません。こうしてタイラー『原始文化』には、原始宗教と思しきアニミスティックな要素、形態が、主題ごとに丹念に集められているのです。

タイラーには、残存という考え方があります。人類の文明の中にも、その文化が経過してきた野蛮、低級、未開の状態にあった時の文化を「残存」させているという見方です。「諸々の霊的存在への信念」が宗教なら、アニミズムもそのひとつです。キリスト教、イスラム教や仏教などの大宗教も、間違いなく、野蛮、低級、未開の状態の宗教の原始的形態を残存させています。キリスト教などの大宗教と同様、アニミズムも「諸々の霊的存在への信念」です。未熟であって、一部には邪教視されマージナルな宗教として残存しているにすぎないとしても、一人前の宗教です。アニミズムは宗教の起源であるだけでなく、宗教そのものでもあるでしょう。ここで仮に、アニミズムという宗教が存在した、さらに絞り込んで原始宗教、あるいは「縄文アニミズム」というような宗教が存在したと仮定することも許されるでしょう。

『原始文化』の新訳訳者の一人である堀雅彦は、アニミズムを「名もなき宗教」だとしています（堀雅彦「宗教を名づける——アニミズムその他のいくつかの「イズム」について」、北海道北方民族博物館『北で生きるよすが』pp.44-50）。アニミズム、マナイズム、フェティシズム、トーテムイズム、シャーマニズムなど、「イズム」と名の付く宗教の特徴を3点にまとめているのです。

1. 西洋人が非・西洋の特定地域の現象をさす言葉として作り、後に類似の現象に対して地域

的な限定なしに使用されるようになったこと。

2. 宗教の起源、あるいは最古の宗教形態を指すものとされ、今なお「原始的」形態を多少ともとどめるとされる現象に対しても適用されていること。

3. 多くの場合、「自然崇拜」のカテゴリーに属すると見なされる宗教現象に対しても適用されること。

要するに、「イズム」と名の付く宗教は、固有の「名前のない宗教」で、西洋人によって便宜的に「……イズム」という名前を付けられた、霊的存在への信念だということです。なかでも、アニミズムは最古の宗教で、縄文人は、自然の万物に靈魂が宿ると信じていたに違いない。

◆「スピリチュアリズム」を回避する理由

アニミズムと同類のコトバとして、スピリチュアリズム Spiritualism があります。研究社『新英和辞典 第5版』には、次のようにあります。

Spirit 1. (生命の) 息、生氣、精氣 (神によって吹き込まれる息の中にあると考えられた生命力の根源)。2. a. 人間の霊的部分、霊、心 (soul) b. (死体から離れた) 靈魂. 3. a. 亡霊、幽霊 (ghost) b. (天使・悪魔・悪鬼・妖精など) 超自然的存在 [以下略]

Spiritualism 1. a. 心霊論、降霊説 (死者の霊は死後も生きていてその存在を示すという説) b. 降霊術、交霊術、神降ろし、口寄せ (霊媒によって使者の霊と交信する術) 2. 精神性質 (傾向) 精神性、靈性。3. 《哲学》a. 唯心論、観念論 (idealism) (←→ materialism) b. (精神面を主張する) 精神主義。

タイラーは、「本来なら [英語の] スピリチュアリズムという用語を一般的な意味で用いることができるだろう」と言っています。しかし、「この語は今ではある特定のセクトを指す用語になってしまっている」。セクトの手垢にまみれてしまっているから、使えない。そこで、「本来の〈心霊主義〉を意味するものとして、また霊的存在に対する一般的信念を表す言葉として、ここではやはりアニミズムという語を用いることにしよう。」(p.520)

しかしながら、特定の心霊主義セクトの余波を受けていない、日本の我々としては、Spirit、Spiritualism という用語を使用して、アニミズムを理解するのも可能ではないでしょうか。英和辞典においては、アニミズムの辞書的意味合いは、以下の通りです。このうち、2をアニミズムの訳語として用いることにしましょう。精霊崇拜、精霊説、有霊観 (人または物に憑く霊や魔物 (demon))。

Animism [研究社『新英和辞典 第5版』]

1. 物活説。アニミズム、有霊観 (あらゆる対象に生命を認める考え方)。
2. 精霊崇拜、精霊説、有霊観 (人または物に憑く霊や魔物 (demon) の存在を信じる説)。
3. 活力説 (vitalism)。
4. 靈魂が生命と健康の源泉であるという教義。

(2) 低級種族は、どのようにしてアニミズムを発見したのか？

すべての人間は、生命と幻像という二つのものを持っている。そこで、この二つのものについて、低級種族は、考えをめぐらしたのだと、タイラーは見ます。

①生きている肉体と死んでいる肉体では何が違うのか？ 何が人に活気を与え、眠らせ、忘我状態 (トランス) にさせ、病気にさせ死なせるのか？

答え：生命は、肉体が感じたり考えたり、行動したりすることを可能する。

②夢や幻のなかに現れる人間の姿の正体は何か？

答え：夢や幻は、肉体の似姿ないし第二の自己である。

生命も幻像（夢）も、肉体から分離ですることができます。生命が肉体を離れると、肉体は感覚を失ったり死んだりします。また幻像（夢）においては、肉体から離れたところにいる人々を、眼前に現すことができます。

ここから、幽霊の魂が定義されます。

「非常に微かな、実体のない人間の似姿であり、性質としてはまるで蒸気か、薄い靄か、影のようなものだが、個人に生気を与え、生きさせたり考えさせたりする。そして、過去および現在における肉体的所有者の個人的意識や意志判断を主体的に支配する。」

幽霊の魂を、「微かな、実体のない人間の似姿」としているのは絶妙です。人間に似てはいるが、微かで、実体がない。

「それはまた、肉体を離れて瞬時にあちこちを跳び移ることができ、人がそれに触れることも見ることもほとんどできないのに、物理的な力を示しもする。そしてなにより、人が眠っていようと起きてようとおかまいなく、誰かの幻影（ファンタズム）として姿を現すことがある。それは本人の肉体から離脱しているが、もとの姿にそっくりである。その人の肉体が死を遂げたあとでもそれは存在し続け、人々の前に姿を現し、他人の体や動物の体、はては物体にまで入り込み、乗っ取り、動かしてしてしまう。」（上 pp.523-524）

これはアニミズム発生の核心を突いているでしょう。こうした原始的なアニミズムは非常にうまく自然の事実を説明できるため、高度の教育が発展した文明社会にも存続したそうです。

「アニミズムはいまだその本来の特徴の痕跡をとどめているし、その原始時代の遺産を文明社会における現在の心理学のなかに見いだすことができる。」（p.524）いわゆる「残存」です

大量の証拠品の中から典型的な事例を選び、魂に関する古来の理論が示されます。以下は、そのほんの一例です。

◆影という語が魂を表現するのに使われる。人が影を失うのは致命的なこととされている。例：影をなくした男。

◆死体は腐っても「われわれの目のなかの人」は死なずにさまよい歩く（ギアナのマクシ族）「人の生気を瞳のなかの小人と関連づける発想は、ヨーロッパの口頭伝承でもめずらしくない」。ここで、「われわれの目のなかの人」は、遮光器土偶を見るうえで注目しておくに値するでしょう。

◆人には魂が二つある。一つはその人の影、もう一つは息。マレー人は、死につつある人の魂はその鼻孔から抜け出すと考えており、ジャワではナワという語が「息、生命、魂」を表す。

◆「人は死ぬと、口からその人自身に似た姿の何かが出てくる。それはユリオと呼ばれる。このユリオはその人の生前の住み処に向かっていく。それは人間ようだが死ぬことはなく、なおかつその人の体はやはりそこにあうのである」（ニカラグア宗教調査）。

◆「魂を息とする考えはセム系やアリア系言語の語源にもたどることができ、世界中の哲学の主流にも入り込んでいる。ゲルマン言語のガイストと英語のゴーストも本来は「息」の意味合いをもっていたらう。

別の書物になりますが、アルタイ系諸民族の世界像である「シャマニズム」を観察したウノ・ハルバ『シャマニズム——アルタイ系諸民族の世界像』（田中克彦訳、東洋文庫）においては、《いき》が発見されています。アルタイ系諸民族は「低級種族」と見られます。

「人であれ動物であれ、およそ息をするすべてのものに見られる生命現象を、テュルク諸民族は《いき》と呼んでいる。臨終のとき《いき》は口や鼻孔を抜けて肉体を離れ、湯気のように跡

かたもなく飛び去ってしまう。」「《いき》立ち去れば必ず続いて死が起こるので、《いき》はまた当然いのち、体温、生命力という意味を持ちうる。」

「眠っているときでなく、病気の時もまた、《魂》は肉体の外へ出ていくことがあると信じられている。病人の顔色は蒼ざめている——死者もまたまっさおである——ため、もとの《見かけ》の喪失は、病気や死と深い関係があるという観念が生じる」。(『シャマニズム1』pp.262-263、2013.1)

また、アイヌに在っては、〈ラマツ〉です。〈ラマツ〉に一番近い訳語は、「魂」または「精神」「靈魂」です。N.G.マンローが『アイヌの信仰とその儀式』(小松哲郎訳、国書刊行会)で紹介しています。

「どんなものでもそれが燃えてしまったり壊れたりすれば〈ラマツ〉はそこから抜け出して行きます。人や獣や木や草のような生きているものが死ぬと、〈ラマツ〉はそこから去ってどこか別の場所へと向かいますが、決して消滅することはありません。従って死者を埋葬する時には、死者が生前使っていた弓矢や道具類を壊して死者と共に地中に埋め、それらの品の〈ラマツ〉が死者の〈ラマツ〉といつまでも一緒であることを願うのです。」(同上 p.16)

〈ラマツ〉を描くなら、ワーズワース(英国の詩人、1770-1850)の詩の一節に勝るものはないそうです。

「動き移ろう魂は 物思うもの 物思わぬものを なべて駆り立て かくて万物の中に 宿らんとす」(同上 p.16)

(3) 呪術師の仕事は失われた魂を呼び戻すことである

生命は魂によってもたらされる。それでは、魂が体から遊離したら、どういうことなるのか? タイラーによれば——

南オーストラリアの現地人は、感覚が麻痺したり失神したりすることを、「魂が抜けた」と言う。

北米アルゴンキン・インディアンは、病気になることを、病人の「影」が不安定になったり、体から離れたりすることとして説明する。われわれなら病気になった人が回復したというはずのことを、彼らはその人がいったん死んで、再びやってきたのだと考える。

ウノ・ハルバ『シャマニズム』にも、魂と病気の関係が描かれています。

「眠っているときだけでなく、病のときもまた、《魂》は肉体の外へ出ていくことがあると信じられている。病人の顔色は蒼ざめている——死者もまたまっさおである——ため、もとの《見かけ》の喪失は、病気や死と深い関係があるという観念が生じる。それは病気のしるしではなく、その原因であるとすら考えられている。……《影》あるいは《姿》は、人間存在の特殊な一部分であり、それが肉体を離れると、病気や死の原因にさえなり、肉体の外にあって独立した生活を営むものであるという観念に到達した。」(pp.163-164)

タイラーは、失われた魂を呼び戻すことが、邪術師や祭祀の通常の仕事になっているのだ、と見なしています。

オレゴン州の原住民であるセイリッジ・インディアンの考えでは、魂の身体からの離脱が致命的な結果をもたらさないように、呪医がおごそかにその人の頭から霊を送り込み、定着させる。北アジアのトゥラン族、つまりタタール諸族の人々は、病気になると人間から魂が抜け出てしまうという考えを強くもっている。仏教を信仰する諸部族でも、ラマ僧が非常に入念に魂を取り戻す儀礼を行う。

ビルマのカレン族は、病人からさまよい出た魂をつかまえようとしてあちこち駆けずりまわる。魂が一定の期間以上体から離れたままになっていると病気になり、永久に戻らないときには、そ

の人は死ぬことになる。

「このように靈魂が一時的に離脱する現象は、妖術師や祭祀や予見者の行う処置のなかに全世界的に見られる。彼らは、自分の霊を遠くに旅立たせることができると称し、また実際に本人たちも自分たちの魂が一時的に身体の牢獄から解放されると信じていることも多い。」

「グリーンランドの呪医の魂は、頻りに現れる魔物を捕まえるために体から抜け出ていくし、トゥーラン族のシャーマンは自分の魂が霊の世界から秘密の知恵を持ち帰るまで、昏睡状態で横たわっているという。」

「眠っているあいだに魂が旅をするという発想は、野蛮な段階に始まり、ヴェーターンタ学派の説やカラバなど比較的高度な思弁的哲学のなかにも見られる。」(pp.531-537)

ヨーロッパの民間伝承には、体を抜け出した魂が帰り道を見失うといけけないので、眠っている人に寝返りを打たせまいとする発想があるそうですが、日本には、ろくろ首があります。ろくろ首は、夜間に人間などを襲い、血を吸うなどの悪さをする。このろくろ首は寝ているときは首だけが飛び回っているが、この体を移動すると元に戻らなくなるという妖怪です。

肝心のことながら、人の魂、幽霊は、霊医にしか見えない。アンティル諸島の現地民は、一人で歩いているときに死者を見かけることはあっても、大勢で一緒に歩いていたら見えない。フィン人にとっては、死者の幽霊はシャーマンにしか見えない。幽霊の声は「さえずり」「かぼそい呟き」とする古典的表現があるが、それらはかなりの程度まで霊媒師のものだといえる。魂がエーテルのようだという説は広く信じられてきて、この説は現代の哲学にも受け継がれているが、これにはか細い理屈をあれこれ弄する形而上学に墮している。(上 pp.530-552)

人の魂、幽霊を写真に撮ったというインチキを心靈写真と言いますが、アイヌが初めて写真にであったときの反応が、ジョン・バッチェラーの著作に描かれています。

「写真を撮ったり写生したりすると(殊に裸体のまま)、一種何等かの神秘作用により生命が縮まるとは、古くからのアイヌの信仰であった。「アイヌは写真を撮られると、その人は幽霊に変わってしまうと思っているらしい。」以下はピョートルグラス・ハワード『シベリア蛮族横断記』からの重引です。

「ある日、数名の人が酋長の家に来合わせた。私はこれぞ、彼等の驚異を唆る好機と思ひ、新しく仕上げた彼らの肖像が、どんな感興を惹起するか俟ちかまへた。処が焉ぞ知らん、彼等は発砲されたかの如く、即座に跳り上がり酋長を除くの外は狂えるが如く戸外に飛び出した。老酋長は非常に悶へ苦しみ、家中を地団太踏んでみた。外で怒り狂ふ大騒ぎに、私は戸口に行つてみると、今まで私が温順の徳を讃えたその人々は、怒鳴立てて私を脅迫するかのごとく振舞ふた。」(『アイヌ人とその説話』 p.273)

(4) 殉死——妻や従者などを犠牲として捧げ魂をあの世に送る

「死によって身体を離れた魂や霊は、墓の近くをうろついたり、地上をさまよったり、宙を飛んだり、さらには霊の居るべき場所——つまり墓場の向こうの世界へと、移動するものと考えられている。」(p.552)

魂は死によって解放され、自由で行動的な存在になる——この考えを論理的に一步進める。すると、霊界で使役するために人を殺害してその魂を開放してその魂を開放しようということになる、つまり或る死者の葬儀に際して生贄が供せられる(いわゆる殉死)。殉死こそ、アニミズムを特徴づけている葬儀だとタイラーは言うのです。

「身分的に高位の者が死ぬと、その魂はしかるべき場所へと旅立つが、葬儀の際に殺された彼の召使や妻たちの魂も主人の魂に同行して、死後の生においても彼に奉仕し続けるというのが、

古代哲学にとっての合理的推論である。」(p.552)

ボルネオのカヤン族の実力者の葬儀では、奴隷たちが殺害され、死者に従い、その世話をさせられる。フィジーの英雄ラ・ムブティが海で命を落としたときは、彼の妻 17 人が殺害された。戦士・奴隷・妻などを大量に犠牲にして、あの世でも引き続き同じ仕事をさせようとするのは、メキシコ、ボゴタ、ペルーなどの首長や君主に広く見られる葬送習慣である。死者を伴う葬式については、アフリカの東部・中央部・西部など広範に渡って恐ろしい記述や絵画の記録が残っている。17 世紀の日本では高位者の死に殉じて 10～30 人の従者が「ハラキリ」をした。中国でも、夫に付き従って妻が自殺することは普通に承認されている慣行である。カエサル時代のガリア人たちは、死者が出ると盛大な葬儀を催し、彼が生前愛したありとあらゆるもの、つまり動物や奴隷や部下などを片っ端から火にくべた。スラブの異教徒の記録には、死者とともに衣服や武器、馬、猟犬、忠実な従者などを火にくべた。(pp.552-561)

こうした事例が延々続いています。引用はこれくらいにします。

日本の例では、『魏志倭人伝に「卑彌呼以死大作冢徑百餘歩徇葬者奴婢百餘人」、つまり、邪馬台国の卑彌呼が死去し塚を築いた際に、約 100 人の奴婢が殉葬されたというのが著名です。時代をさかのぼって、果して、弥生時代や縄文時代に殉死はあったか、なかったか。両時代ともに、アニミズムが跳梁跋扈していた時代環境ですから、あったと仮定していいと思います。

「首狩り」という残酷な慣習も同様な発想から生まれてくる、とタイラーは言っています。ダヤク族——ボルネオ島(カリマンタン)に住むプロト・マレー人系の原住民。「彼らは人間の頭部を入手できれば、あの世では、それが自分のために奉仕すると考えており、あの世での地位は首を幾つもっているかによって決まるとされる。したがって死者が出ると、その死者の奴隷として「魂の住まい」に付き添う者の首がもたらされるまで、人々は喪に服し続ける。たとえば息子を亡くした父親はその弔いの儀式として家を出、最初に出会った男を殺害する。また、若者は首を一つ手に入れるまで結婚しようとしな。ある部では、誰かが死ぬとその人が最初に手に入れた首を、槍、布、米、キンマの葉とともに埋葬する。ダヤク族のあいだでは、待ち伏せをして首を狩ることは民俗的娯楽(スポーツ)である。彼らの言葉によれば、白人が本を読むように、俺たちは首狩りをするのだ。」(p.553)

首狩りが、スポーツで読書並みの娯楽とは驚きです。首狩りは、かつて台湾の高砂族でも盛んに行われていました。大形太郎『高砂族』(育成弘道閣、1942.12)も以下のように証言していて、タイラー説と平仄が合っています。

「首狩は一名出草と称されているが、其の定義は簡単である。即ち、異種族又は敵対者を馘首する行為を称するものであること勿論である。然らば、何の目的があつてかかる行為にであるかといふに、要するに、ただ敵の首を挙げればよいのであつて、敵勢を挫いたり、又はこれを滅亡せしめたりすることの手段として行ふのではないのである。」「此の意味もなく殺人を行ふところの首狩は、文明人の道德観からすれば、恐るべき害悪であるが、彼等らにとっては、逆にそれが至上至高の道德であつて、これを神聖視し、祖先の遺訓を守る行為であると信じて居たのである。而して此の風習はマレー種族の遺訓であると云われ」る。(pp.43-44)

(5) 動物、植物、モノにも魂がある

動物に対する見方が、文明人と野蛮人では、大きく異なる、とタイラーは見ます。野蛮人は、生きている人にも死んだ人にも真面目に語りかける。また、動物たちに敬意を表し、彼らを捕まえたり殺したりしなければならぬことについて許しを請う。

例えば、北米のインディアンたちは、馬にも知性があるかのように扱う。ある者は、ガラガラヘビを見かけても殺さないが、それは蛇の霊から復讐を受けることを怖れているからである。(アフリカの)カフィール族がゾウを仕留めるときは、まず自分たちを踏みつづさないように祈願し、仕留めたあとは、わざと殺したのではないことをゾウに納得させようとする。カンボジアのステアング族は、自分たちが殺した獲物に許し請い、蝦夷のアイヌは殺した熊に敬意を表してから皮を剥ぐ、等々。「原始的な心理学において動物も人間同様、魂をもつと考えている」(上 p.565)。

縄文時代の、人の動物に対する見方にも、敬意を表した真面目な対応が見られます。「縄文のビーナス」をはじめとする縄文中期中葉の土偶は、頭の上に皿を載せていて「カップ土偶」と別称されていますが、その皿の中にはトグロを巻くヘビ(マムシ)が鎮座していました。アイヌの世界では熊は天のカミが遣わした分身であると了解されていました。また、千葉市の加曽利遺跡からはアイヌの埋葬骨格が発掘されています。

ヤマネコの仮面を被ったシャーマンと見られる土偶(山梨県中丸遺跡出土)が何かを考えるヒントとして、エリアーデ『シャーマニズム』のいう「補助霊」が注目されます。

「外見上、シャーマンが動物の動作や声を模倣するのは「憑依」のように見えるが、より正確にはそれはシャーマンによる補助霊の獲得というべきであろう。動物に変身するのはシャーマンであり、それは動物の仮面を被ったことによって同じ結果に到達するのに等しい。」シャーマンがヤマネコの面をかぶるのは、ヤマネコの形で補助霊があらわれること、それと秘密の言語で対話すること、シャーマンが人間の状態を放棄すること(換言すれば死ぬこと)を示している。「悠久の昔から、ほとんどすべての動物は他界へ靈魂を伴い行く導き手として、または、死んだ人間の新しい形として考えられてきた」(pp.113-114)。

タイラーによれば、植物も、また、魂をもつと考えられています。「実際、中世の哲学では、植物やそれより高次の有機体にも動物のような魂があると考えられていた。野菜に魂があるというのもごく自然な発想であり、それは現在の博物学者も忘れられていない。」(p.568)

アジアの例では、稲の穀霊としての稲魂(イナダマ)が典型でしょう。イネの精霊・靈魂は、人間と同じように誕生、成長、成熟、死、再生を繰り返すとのアナロジーに基づいており、これは年中行事として、東南アジアや日本の民俗の根底を形成しています(『岩田啓治著作集1 日本文化の源流』、1995.4、講談社)。

縄文時代の発掘品としては、ハート型土偶でしょう。この土偶は、大きなハート型の葉に眼鼻手足を造型しており、恐らく精霊の姿を露の葉を借りて表現しています。樹木に靈魂が宿するという祭礼は、真脇遺跡や諏訪神社の御柱祭に見られます。アイヌの樹木崇拜について、ジョン・バッチャラーが、以下のように証言しています。

「彼等は樹木を礼拝するのではなく、樹木に住む精霊を崇拜するのである」「どんな形の生命でも、生命のある所、そこに精霊のある所と思わねばならない。アイヌに取りては、精霊と生命とは同じ本質である。」「故に樹木崇拜の由来する原理は、汎神論的というよりも寧ろ多神論的と思はれないでもないが、その実、この習慣の土台をなしたものは「アニミズム」であらう。」(『アイヌとその説話』 pp.266-267)

しかし、とタイラーは、考察を深めます。

「ある比較的高次の野蛮人は、木、石、武器、舟、食品、衣服、装飾品、その他もろもろの、私たちにとっては魂も生気もないたんなる物に、身体を離れ、単体で生き延びられる魂があると考えているのである。ほかの野蛮人たちも、多かれ少なかれ同じような考えをもっている。」(上 p.570)

こうした突飛な考えを理解するには、われわれが子供の頃、郵便ポストや棒や椅子や玩具に人格を認めていた頃の記憶を必要とする、あるいは幽霊を考えても見よ、とタイラーは言ってい

ます。

「幽霊は裸で出てくるのではなく、服を着たり、時には武装したりしているわけで、人の霊がそうしたものを身につけているとすれば、そうした衣装や武器にも霊があると考えるのは当然なことである」。「おどろおどろしい鎖の音や幽霊の衣服の衣擦れの音などは、幽霊文学にしばしば登場する」。シェークスピア『ハムレット』です。(上 pp.571-572)

衣装の霊、武器の霊、ヤカンの魂、手斧の魂、石の魂、カヌーの魂、家の魂……。

物にも魂があるということが判れば、人の葬儀の供儀に際して、物の魂を転送することが了解されます。

「仮に人が死んでその魂が体から去っていくとしたら、そのとき死者に食べ物や衣服や武器を与えるための方法は、死体とともにそうしたものを焼いたり埋めたりすることである。なぜなら、その死体に起こるのと同様のことが、彼のそばで運命をとともにするように埋められたものにも起こると考えられているからである。」(上 p .578)

アイヌには家送りという祭祀があります。「人死すれば、其家をも調度をも皆焼捨てて、新たに造りて住むと云」(立松懐之「東遊記」)。アイヌの考えでは万物に魂が宿っていて、タマはあの世にいても不滅です。そこで、この世のモノをあの世に送る、住居や調度は燃やすことによって送る。

家送りに類似した遺風はヤマトの庶民の間にも生きています。小正月の火祭りであるトンドでは、松や注連縄を集めて小屋を作り、この小屋を焼く、火の煙とともに元日に迎えた祖霊はあの世に帰ってゆくと、古来日本人には信じられています。家だけでない。動物——例えば貝・イルカ・鰻・馬など、モノ——例えば筆・針・達磨などの御焚き上げ法要が営まれ、その塚が至る所に見出されではないですか。

「家送り」はアイヌだけの孤立した習俗ではないのです。「死者の家を捨てるという習俗もマライシアには広く見られる」(棚瀬讓爾『他界観念の原始形態』p.665,1966、京都大学東南アジアセンター)

(6) 疾病の原因としての悪霊の憑依

病気の原因は、魔物が憑依するからだとされます。

「人間の魂は普段からその人の身体に宿っていて、身体を生かし、考えさせ、話させ、行動させている。ゆえに、全く同じ原則を応用することで、体や心の異常も説明できる。たとえば、新たな症状を第二の魂のような存在物、つまり見知らぬ霊が引き起こしたものと見なすのである。霊に憑依された人は熱に浮かされてのたうち回り、何かの生き物に内側から引き裂かれ捻じられたかのように苦痛を受け、身をよじる。その生き物がまるで日ごと内臓を貪り食っているかのようなのである。すると本人は合理思考の帰結として、人格を持った霊的な何ものかが自分を苦しめていると考える。」(下 p .142)

ボルネオのダヤク族は、病気になること「精霊に悩まされる」と表現する。ニュージーランドでもすべての病は精霊によって、それも幼児や未熟な人間の霊によって引き起こされると考えられている。病気の原因は魔物が憑依したためなら、治療には魔物を体から取り除けばいい。

病気を直すのは、除霊師としての呪術師の仕事になります。

「除霊師は霊に向かって語りかけ、説得したり脅したり供え物を捧げたりして患者の体の外へと霊を導き出し、あるいは追い出して、なんとか他のものに宿るようにし霊を誘導する。」(下 p .143) しかしながら、見逃せないことがあります。

「邪術師たちはそうしたパフォーマンスの最後にきまって病霊を吸い出し、石や小さな肉片の

ようなものを取り出して見せる」(下p .146)。

植民地経営の場合、こうした呪術的治療を看過しがたく、薬剤治療をすすめることもあったようです。「霊が病気を引き起こすという考え方は世界中にみられ、それが強い影響力をもつ地域では人々は呪文や儀礼のことで頭がいっぱいで、薬剤治療や節制といった考えが受け入れられる余地はほとんどない。」(下p .148)

呪術師、除霊師の病気治療能力に対しては、タイラーは極めて厳しく、ペテンと墮していつているとも言っています。「本物であろうが偽物であろうが、神託を伴う憑依のあり方が民衆の信仰を如実に描き出していることは変わりがない。」(下p.148)

ちなみに、台湾総督府民政長官後藤新平宛に提出された民生部事務嘱託伊能嘉矩の復命書には、疾病について以下のように報告されています。

「疾病の原因に至りては、各族を通して死魂の崇奉に帰するに過ぎず。ことにアタイヤル及びスパヨワン二族に在りては円形なる物質を細管または崇匏(ひょうたん)に載せ、若しその上に静止せば以て治癒の兆として、これに反して転落せば不治の兆となすが如き、殆ど迷信のごとき外に求めべからざる慣行」が行われている云々。

また、アイヌの宗教を研究したN.G. マンローは、悪魔払い〈ウエポタラ〉を論じています。「重い病気にかかるのは、ふつうある種の〈カムイ〉たちの仕草か、それとも性悪な悪霊に憑かれた結果であると見なされています。つまり、そのような時には、靈魂の崇りで身の自由が利かなくなるのです。」(『アイヌの信仰とその儀式』 p .139、)

ましていわんや紀元前の低級未開社会に在っては、精霊が病を引き起こし、それを除霊できるのは呪術師しかない信じられていたに違いない。ちなみに、中国では、昔、医者ハマるきり信用がなく、風水師・八卦見・人相見・和尚・道士などと同格の「九流」にランクされていたものです。医術は呪術とチョボチョボのレベルにあり、それにふさわしい社会的地位を用意されたのです。

(7) 霊の実体化としての偶像崇拜

フェティシズム(呪物崇拜)は、物資的対象に、霊が宿ったり、憑依したり、影響力を及ぼしたりすることに対する原理という。「木や石のような無生物への崇拜行為もこれに含めれば、フェティシズムは偶像崇拜へと連続的につながる」とタイラーは言います(下p .160)。

石に神霊が宿るという話は、日本にふんだんにあります。その極みは、「君が代」の「さざれ石の巖となりて苔の蒸すまで」でしょう。この歌は、石の中に神霊が宿っていて、だんだん成長するという古来の信仰がもとになっています(「石に出でいるもの」『折口信夫全集 15』 p .223、中公文庫)。また、山梨県内のいたるところに祭られている丸石道祖神、これは直径 50cmのものから小さなものまで、古代の海底で揺籃されたと見られる真ん丸の不思議な真球体を崇拜の対象にしています。「たま」、「たましい」のフェティシズムでしょう。

こうしたフェティッシュ崇拜からタイラーは偶像崇拜を引き出しています。少し削ったり、線描したり、色を塗れば、自然のままの柱や石も偶像に変貌するのだから。図像崇拜は霊的存在に対する信仰と関係し、実際それはアニミズムに付随して発展したものらしい。具体的な事例を挙げます。

「低級諸部族の多くは偶像がないことが特徴的だが、開明的になってくると図像崇拜が現れる。例えばブラジルの原住民は、天から降りてきたという小人の像を、自分たちの小屋や森の奥なるとともに蠟や木で作って置いておく。マンダン族は草と動物の皮で作った人形の前で唸ったり泣いたりしながら祈りを捧げる。アルゴンキン族やヒューロン族は、木製の頭部やもっと精巧な

塑像や言葉による説明で、それぞれにとっての霊的存在を表現し、祈りや供犠を行う。南部の部族はもっと文化的で、ヴァージニアの人々やその他の民族は偶像が住むための祠まで建てていた。また新世界を発見した人々は、西インド諸島では偶像崇拜が制度化されていることに気づいていた。記録によれば、こうした強力なアニミズム信奉者は小さな塑像を作り、それを精霊が人々に姿を見せるときの形そのものであると信じていたとされる。」(pp.188-189)

偶像に対する脅迫、強制も見られます。

クリル(千島)列島住民——嵐を鎮めるため偶像を海に投げ入れる。

オスチャーク族——人形に衣服を着せて澄んだスープを飲ませるが、なんの獲物ももたらさないときは、鞭打つ。

中国人——「なんてことをしてくれたんだ、このろくでなしの精霊め。お前を立派な祠堂に住まわせ、飾り立て、食事を与え、お香で清めてやったのに、わたしの願を聞き入れようとしないとは、なんて恩知らずなんだ！」

ここには、図像や偶像に精霊が実体化されているというフェティッシュ理論が用いられています。即ち、図像の中に神が宿っており、精霊が実体化していると考えられ、偶像崇拜が行われている。

私のみるところ、縄文後期の精霊は仮面土偶という形をとって現れています。土偶は偶像崇拜の偶像そのものです。仮面土偶の場合、姿形の知れない精霊を実体化した偶像があり、それを崇める呪術依頼人、信者としての一般縄文人がいて、その間に巫女がいます。巫女が被っている土偶の仮面は精霊の顔であり、精霊を実体化させたフェティッシュです。この図像の中には精霊が実体化しており、神が宿っている。しかし、土偶の体は、巫女自身のカラダであって、ヒトのものであります。そして、一般縄文人は、精霊そのものと精霊とコンタクトし得る巫女と両者をかたどった偶像を仰いでいます。フェティッシュの仕掛人は巫女です。

(8) 霊的存在——小精霊、妖精、地霊、幽霊、祖霊、守護霊、悪魔、神々

精霊を崇拜するのがアニミズムですが、その精霊にはどんなものがあるのか？

鍵は二つ。一つは、精霊(霊的存在)は人間をモデルにしていること。もう一つは、精霊(霊的存在)が想定されるのは自然現象を説明するためだということ。

精霊には、大きく分けて二つあります。

①人間の人生に善悪の影響を及ぼす精霊、②自然の運行を司る精霊。

この二つは、切り離しようがないほど互に融合しあっています。すべての土地、山、岩、川、小川、泉、木、その他どんなものにも精霊が宿っている。そうした場所を通り過ぎるときは、ちょっとした捧げものをそっと置いていく。「ホリーウッド(Hollywood)という地名には、聖なる木と森についてのわれわれ自身の太古の記憶が記録されている」(下 p.256)

しかし、アニミズム体系のなかで中心的地位を占めているのは、①です。粗野な部族にとって、「小精霊や地霊、幽霊、祖霊、悪魔や神々などの霊的存在は、生きた人格としての性質をもちつつ、普遍的な生命の力をもたらす原動力だったのだから。」「原始人は人生に起こるすべてのよいこと、悪いこと、それに驚くべき自然の作用を、親切な霊か悪意ある霊のせいにするのができた。彼らは、死後も生前同様に権威を行使する祖霊や、川・森・平原・山などの精霊たちと親しく交わり生きてきた。」「人間の身体は、そのなかに宿る霊—魂のおかげで生きており、世界をうまくまわしているのはそれとはまた別の霊の影響力によるものと考えられた。」(下 pp.213-214)

さて、人間が精霊と明確かつ直接的に交わることができるのは、夢や幻のなかに姿をあらわしたときだ、とタイラーは言っています。

悪夢——たとえばオーストラリア人の夢に現れるコインという魔物はその人を絞め殺そうとし、「ナ」という邪悪な霊は、カレン族の腹部の上にかがみこむ。宴会で満腹になった北米インディアンのところには、夜行性の精霊が集まってくる。

男女の悪夢——男性女性を性的に結び付けようとする夜行性の悪夢、つまりインクブス〔男夢魔〕とスクブス〔女夢魔〕はその好例である。インクブスとスクブスの行う夜間の性交についての膨大な議論が、中世文明の最盛期まで蓄積され続けた。こうした議論は聖職者や法律家にも完全に信じられ、受け入れられていたことがわかっているそうです。

吸血鬼——夜行性の魔物である吸血鬼がある。病人が、特に原因もないのに日々痩せていくと、それに満足のいく説明を与えるために未開のアニミズムの出番が来て、患者の魂や心臓を食べたり、血をすすったりする悪魔がいるはずだということになる。吸血鬼の原理は、死者の魂が埋葬された死体から抜け出し、生者の血を吸うという者である。

暗闇には特に、害のある精霊が集まってくる。南インドでは跳梁跋扈する精霊を怖れて、日没後はよほどの必要のないかぎり、人は戸外に出ようとしない。ヨーロッパでは、魔物や魔女を追い払うための火の使い方に細かい作法がある。近代に入っても、ヘブルディーズ諸島の人々は母親と子どもの周りに火を置くことで、邪悪な精霊からも守ろうとしている。(下 pp.213-223)

しかし、そうした悪霊から守ってくれる守護聖人や守護神などの精霊もある。こうした存在は個人と関連付けられていて、性質としては魂に近い。守護天使はその人を見守り、守護してくれ、神秘的知識を与えてくれたり、魔法で手助けしたりする。

では、自然の場合はどうか？

イロクオイ族の場合、善き精霊の目に見えない助力に感謝しており、無数の精霊たちのなかに真の人格を見ていると考えることができる。また、古代中国では、精霊たちに人格が認められていたことを証明できる。孔子は言っている。「祭ること在于（いま）すが如くし、神を祭ること神在すが如くす」(『論語』)と。

具体的には——。

- ・火山、渦巻、岩の霊。
- ・水崇拜——井戸、小川、湖などの霊。
- ・樹木崇拜——樹木に実体化したり宿ったりする霊、林や森の霊。
- ・動物崇拜——直接的に崇拜される動物、または神々の代表や生まれ変わりとしての動物、トーテム崇拜、蛇崇拜。

等が世界各地から多数涉猟されています。それらのうち、ここでは動物崇拜として熊と蛇のみをピックアップしてみましょう。

「北米インディアンは熊を殺したらその顔に多彩な色を塗って掲げ、敬意を表して褒め称えておきながら、肉は宴の御馳走にするという痛ましい義務があった。蝦夷地の原住民は、アイヌ民族にとっても、熊はとても神聖な存在である。アイヌは可能な時は熊を仕留め、肉を切り分けながら謙虚に敬意を表し、丁寧な言葉で語りかける。そして熊の頭を家の外に掲げて魔除けの役目を果たしてもらおうとする。」「タタール人は蛇や熊や狼や白鳥、それに空を飛ぶ鳥や他の野生動物についても、機嫌をとろうとする。隠れた霊の生き物たちの中に宿っており、人間にとってそうした生き物たちは、よき庇護者となるからだ。」(下 pp.260-261)

「北米インディアンはガラガラヘビを崇拜するとき、それを蛇の祖父や王と見なしたり、順風や、時には嵐も起こすことができる聖なる守護者と見たりする。」「アテナイにはアクロポリスを守護する巨大な蛇がいて、毎月蜂蜜菓子を供えられていた。また、ローマの地霊は蛇の姿で現れる。」「蛇崇拜がインド仏教で並々ならぬ地位を占めていたことは、寺院に祀られた五つの頭をもつ蛇神の彫刻がサーンチーの仏塔に彫ってあることによって今でも明らかに見てとれる。」「蛇は世界の諸

宗教において、高位の神々の生まれ変わりとして、神々が宿る場所として、あるいはシンボルとして顕著な地位を占めている。」(下 pp.266-268)

(9) アニミズムとシャーマニズム

私はさきに第 18 回論考において、縄文後期の典型である遮光器土偶に触れて、シャーマンとシャーマニズムについて論じました。シャーマニズムとは何か？ 宗教社会学者の古野清人(1899-1979)によれば――、

「シャマニズムはシャーマンの語から出たアニミズムを基本にした呪術宗教的な体系である」。シャマニズムは宗教の埒外にある呪術的社会現象ではなく、〈原始宗教〉の重要な部分を占めていて、「タイラーの言葉を借りれば、精霊、死霊、霊魂、神々などである。」(『古野清人著作集 3』「シャマニズムの研究」p 74、p.140、1974.5、三一書房)

また、シャマニズム研究の専門家である佐々木宏幹は、シャマニズムを以下のように定義しています。

「シャマニズムとは通常、トランスのような異常心理状態において超自然的存在(神霊、精霊、死霊など)と直接に接触・交流し、この間に予言、託宣、卜占、治病、祭儀などをおこなう人物(シャーマン)を中心とする呪術・宗教形態である。〈シャーマン〉の語はツングース系諸族において呪術師を意味する〈サマン saman〉に由来するという説が有力である。」(『世界大百科事典 12』p.741)

タイラー自身はシャーマニズムという言葉は一切使っていません。シャーマニズムというコトバには、研究史の時代的制約とグローバルでなく北アジア・極北地域という地域的な制約とが潜んでいる。研究史としては 19 世紀以降、北アジア・極北地域の呪術・宗教的職能者一般に適用され、その後 20-21 世紀にさらに世界各地の類似職能者を意味する用語として広く使用されるに至ったからでしょう。

[なお、ツングース語 šaman はシャーマンあるいはシャマーンと表記すべきだという異議申し立てがあるが、日本ではシャーマン、シャマニ両方が通用していて、どちらか片方にしようとする、混乱を生じてしまうので、以下では引用文献に従う。]

タイラーは、シャマニズムという言葉は使っていませんが、シャーマンの方は使っています。それらの類義語を拾ってみます。

「グリーンランドの呪医の魂は、頻りに現れる魔物を捕まえるために体から抜け出ていくし、トゥーラン族のシャーマンは自分の魂が霊の世界から秘密の知恵を持ち帰るまで、昏睡状態で横たわっているという。」

人の魂、幽霊は、霊医にしか見えない。アンティル諸島の現地民は、一人で歩いているときに死者を見かけることはあっても、大勢で一緒に歩いていたら見えない。フィン人にとっては、死者の幽霊はシャーマンにしか見えない。幽霊の声は「さえずり」「かぼそい呟き」とする古典的表現があるが、それらはかなりの程度まで霊媒師のものだといえる。魂がエーテルのようだという説は広く信じられてきて、この説は現代の哲学にも受け継がれているが、これにはか細い理屈をあこれこれ弄する形而上学に墮している。(赤字引用者・以下同、上 pp.530-552)

シャーマンの同義語として、他に呪医、霊医、霊媒師、予見者、除霊師、邪術師、占い師などが登場しています。それらを、以下にピックアップしてみます。

霊魂が一時的に離脱する現象は、妖術師や祭祀や予見者の行う処置のなかに全世界的に見られる。彼らは、自分の霊を遠くに旅立たせることができると称し、また実際に本人たちも自分たちの魂が一時的に身体の手獄から解放されると信じていることが多い。

「失われた魂を呼び戻すことは邪術師や祭祀の通常の仕事の一部となっている。オレゴン州の原住民であるセイリッシュ・インディアンの考えでは、霊は生命の根源とは別物なので本人が意識しないうちに、短時間身体を離れることができる。呪医がおごそかにその人の頭部から霊を送り込み、定着させる必要がある。」(上 p.531)

「除霊師の行動は、人格をもった霊的存在が引き起こしたものであるとしての病気や精神不調の概念を実に生き活きと示している。除霊師は霊に向かって語りかけ、説得したり脅したり供え物を捧げたりして患者の体の外へと霊を誘い出し、あるいは追い出して、なんとか他のものに宿るように霊を誘導する。」(下 p.143)

「アメリカ大陸の民族誌も、粗野な種族が病の原因を邪霊の活動に帰していたことを記録している。例えば、ダコタ族は、死者のために宴会を怠るような不始末をしでかせば精霊から罰を受けると信じている。そうした精霊は、熊、鹿、亀、魚、樹木、石、虫、死者の魂など、なんらかの精霊を患者の体内送り込んで病気を引き起こす力をもつものと考えられている。患者に向かって呪文を唱えたり、ビーズを詰めたヒョウタンのようなガラガラの音に合わせて「ヘレリラ……」などと歌ったり、とり憑いた生き物に見立てた木の皮を象徴にして儀礼的に矢で射たり、霊を追い出すために病巣に口を当てて吸い出したり、逃げ回る霊を狙うかのように銃を撃ったりする。」(下 p.146)

「こうしたことはコロンブスの時代には西インド諸島ではさかんに行われていた。修道士ラモン・パネが残した奇妙な記録にも、現地の呪術師が(まるでズボンでも脱がすように)患者の足から病気を引き抜いたり、家の外に出て撃とうしたり、海や山へ帰れと命じたとある。邪術師たちはそうしたパフォーマンスの最後にきまって病霊を吸い出し、石や小さい肉片のようなものを取り出して見せる。そして、供え物や祈りによる賛美や祠の建立を怠った罰として守護霊や神(ケミ)が病をもたらしたのだと、患者を納得させる。」(下 p.146)

「アフリカのソト族とズールー族の哲学によれば、病の原因は死者の幽霊が生者を仲間に取り込もうとしたり、犠牲にした獣の肉を供えさせようとしたりするためである。占い師や患者自身が災いを起こしに来る霊を夢に見るのだという。コンゴの諸部族も同様に、死者の魂が強力な霊たちの仲間入りを果たすと、人々に病や死をもたらすようになると考えられている。それゆえこの両地域では、医療とはほとんどまったく宗教的な問題であり、病をもたらす先祖の霊に祈り犠牲を捧げて怒りを鎮めることを意味する。」(下 p.146-147)

以上に見る呪医、霊医、霊媒師、予見者、除霊師、邪術師、占い師などは、一括してシャーマンと言い換えることができるでしょう。シャーマンには、精霊の姿かたちが見えます。精霊に向かって語りかけ、説得したり、脅したり、あるいは誘い出したりする。供え物を捧げて、精霊を誘い出したり、他のものに宿るように仕向けたり、呪術師の精霊を意志に従わせることができる。あるいは呪術師は、逆に他のものに宿るように精霊を誘導することも可能です。かれらは病気の原因になっている精霊、死霊、霊魂などに対して、その活動をコントロールしようとしています。呪術師の多くは呪医、霊医ですが、これらの呪術師の行っていることは、怪しげではないでしょうか？ ここで肝心なことは、シャーマンは、精霊が存在するというアニミズムの信念を逆立させて、精霊が実際に存在するものとしていることです。

こうした呪術師たちの呪術に対してタイラーは、極めて冷やかです。詐術、インチキという言葉がいまにも口をついて出てきそうです。英語で、MAGIC は、呪術も、手品も含意していることを彷彿させます。「①魔法、魔術、呪術《降雨・生死・病気治療などを左右する力があるという神秘的な術》 ②奇術、手品 ③不思議な力、魔力」。(Kenkyusha's NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY)

タイラーは「呪術」を「オカルト科学」とも呼んで、この種の観念の特徴を手厳しく批判します。まず、呪術の専門集団としての職能者＝呪術師の存在について。

第一には、呪術を、信頼と権力を伴うものとして維持することに関心をもつ職能者たち（職業的呪術師や占い師のほか、聖職者や医師など）の影響力によって、その存在が支えられてきたこと。

第二には、呪術師は騙される者であると同時に騙す者でもあり、信者としての活力と偽善者としての狡猾さなどが、一つに結びついていること。オカルト科学は誠実ではあるが誤った哲学体系である。（上 p 168-170）

呪術の担い手である呪術師、シャーマンを、このように非科学的な閉鎖的社会の特権的産物として断じているわけです。そればかりではありません。「オカルト科学」を理解するうえでのカギは、その考えの基礎が観念にあり、思考において原因と結果を逆立ちさせる誤りを犯しているのだと断じています。

「観念連合は、まさに人間理性の地盤に位置する作用だが、それはまた、少なからず人間の非合理性の地盤に位置するものでもある。人間は、知的にはまだ低級な段階にいたあいだは、経験によって事実上の関連があると思われた諸々の事物を、思考のうえでも関連づけていた。しかしその後、人間はこの作業を逆立させる誤謬に陥り、思考において関連するものは現実においても同様のつながりをもつに違いない、と結論づけるようになった。現在でこそわれわれは、そうしたことにはたんたる観念上の意味しかないと理解しているが、当時の人々はそのような観念連合によって、現実の出来事を発見し、予見し、さらには発生させようとしたのである。呪術はこのように、観念上の関係を実際上の関係と見誤ったところに生じた。野蛮、未開、文明といった各段階の生活から得られた膨大な証拠からすれば、呪術的な営みは低級な文化のなかに生まれ、育まれ、やがて高次の文化へと入り込んでいった形跡が明らかに見て取れるだろう。」(p.149)

ここからアニミズムとシャーマニズムは、簡略化して以下のように描けるでしょう。

アニミズム——「霊的なものが存在するという信念」（霊の信念というフィクション）。

シャーマニズム——「霊的なものは事実上存在する」（霊が実在するというフィクション）。

シャーマニズムの実例1：遠く離れた人に対し、その人の密接に関連するもの——その人の持ち物、着ている服、わけても代表的なのは切った髪の毛や爪——に働きかけることで影響を与えるという実践。

シャーマニズムの実例2：オーストラリアでは、土着の医者が患者の患部に紐の端を結び、もう一方の端から吸うしぐさをする。

シャーマニズムの実例3：今日でも、仏教の僧侶たちは厳かな儀式が行われるあいだ、聖なる宝物の近辺と寺院の周りに結ばれた長い糸を各々が手にし、その宝物とのコミュニケーションを図っている。

観念連合の実例としては、ほかに予兆、夢占い、動物の内臓や肩甲骨のよる占い、手相占い、棒占い、指輪占い、ざる占い、占星術など多数紹介されています。これらに対してタイラーの評価は実に手厳しい。「オカルト科学は誠実であるが誤った哲学体系なのだ」と (p.170)

呪術の観念連合と言えば、J・G・フレーザーの共感呪術が彷彿させられます。フレーザーはタイラーに学び世界の呪術例を渉獵して『金枝篇』をモノしましたが、『金枝篇』の全編を貫いているのは「呪術の原理」です。

「呪術はどのようなものの考え方に根ざしたものなのか。その原理を分析すれば、次の二点に帰着するようだ。すなわち、一つは、似たものは似たものを生み出す、言い換えれば、結果は原因に似るということだ。もう一つは、かつて接触していたものは、その後、物理的な接触がなくなったのちも、引き続きある距離をおきながら互に作用しあうということだ。前者を「類似の法則」と呼び、後者を「接触の法則」あるいは「感染の法則」と呼んでもよい。このうち第一の「類似

の法則」の原理から、呪術師は、どんな事象でもそれを真似るだけで思いどおりの結果を生み出すことができると考える。また、第二の「接触あるいは感染の法則」に原理から、呪術師は、誰かの身体とかつて接触していたものにたいして加えられた行為は、その接触していたものがその人物の身体の一部であったにせよ、そうでなかったにせよ、その行為とまったく同じ結果をその人物にもたらすと考える。」

フレーザーが「類似の法則」と「感染の法則」がタイラーの「観念連合」に学んでいることは明らかですが、呪術に対して手厳しいことはタイラーに輪をかけています。「呪術というのは人を導いて惑わす行為であると同時に、自然の法則の体系に見せかけたものがある。未熟な技術であり、まやかしの科学なのだ。」(吉岡晶子訳『図説金枝篇』p.84、2011.4、講談社学術文庫)

ところが、聖なる王は、もともと呪術師であった。この人を惑わす呪術の具体的な姿形を、世界各地の膨大な神話、伝承、慣習の中に涉獵して、証明して見せたのが、『金枝篇』だったので。

(10) シャーマニズムとして復権するアニミズム

シャーマニズムを支えている「霊的なものは事実上存在する実在」(霊が実在するというフィクション)が「オカルト科学」「誤った哲学体系」だとしたら、その一方、アニミズムを支えている「霊的なものが存在するという信念」は、どうだと言うのか？

タイラーは、野蛮—未開—文明といった歴史段階に沿って探求してみると、「この理論の状態がしだいに実証科学に適合していく一方、それ自身は不完全で一貫性を欠くものになっていることがわかる」と見えています。19世紀は実証科学勃興の時代です。人々の物理科学の知識が素朴な哲学の水準を超えるようになる。しかし、「人はまだいくらか物の魂や幽霊を信じているように振る舞う」。

まず植物。「植物に魂があるという考えが歴史のなかで徐々に消えていった」。

次いで動物。「今日のわが国では動物に魂があるという考えはほとんど消滅している」(上 p.952)。

そして、人間の霊についての考えが、物理的な力と法則の観念にとって代われようとしている。

「今日では燃える太陽の生命を制御する内なる神はいないし、天空で星々を運行させる守護天使もいない。聖なるガンジス川は海に流れ込んで蒸発して雲となり、再び雨となって降り注ぐ。沸騰中の渦の中に怒っている神はいないし、火山を支配する精霊もいない。霊的生命が全宇宙を始動させたと考えられた時代もあったが、それもすでに過去のことである。霊的生命が全宇宙を始動させたと考えられた時代もあったが、それは過去のことである。」「物理学や化学や生物学が古代のアニミズムの全ての領域にとって代わり、生命のことは力の概念で、意志のことは法則の概念で考えるようになってきているからである。」(下 pp.198-199)

タイラーによれば、アニミズムを支えている「霊的なものが存在するという信念」は、存亡危急の状態にあります。

「実際のところアニミズムは脇道にそれながらも、その最初の主な立ち位置、つまり人間には魂があるという考え方に集約される。この教義は文化の進展につれて極度の変容を遂げてきた。アニミズムは、夢や幻想のなかに現れる靈魂や幽霊が客観的に存在しているという有力な思想をほとんど失いつつも、生き延びたのである。魂はその霊妙な実体としての存在性を失うと同時に、非物質的な存在、つまり「陰の影」となった。この理論は生物学や精神科学の調査研究から離脱し、現在は純粹経験に基づいて、生命と思想、感覚と知性、感情と意志などの現象に関する議論となった。「心理学」は非常に重要な知的産物として勃興したが、それはもはや「魂」とは無関係となっ

たのである。」(傍線引用者、上 pp.953-954)

アニミズムは、夢や幻想のなかに現れる靈魂や幽霊が客観的に存在しているという有力な思想をほとんど失って、辛うじて生き延びているという認識は、まさに深刻で危機的です。

魂はその靈妙な実体としての存在性を失った。と同時に、非物質的な存在、つまり「陰の影」となった、ありていに言えば、「信念」だけの存在となったのです。

したがって、生物学や精神科学の調査研究の対象とはならなくなった、心理学とも無関係となってしまった。

残るは純粹経験に基づいて、生命と思想、感覚と知性、感情と意志などの現象に関する議論だけです。「純粹経験」とは西田幾多郎で有名ですが、「反省を含まず主観・客観が区別される以前の直接経験」を指すという哲学用語です。この文脈では、アニミズムの探求が、哲学議論に追い詰められたと見ておくだけで十分でしょう。

タイラーは、危機感を募らせています。

「近代思想において「魂」が扱われるのは、宗教の形而上学においてである」と。即ち最後の牙城は宗教学だけです。そして、追い詰められた〈アニミズム〉と新興隆盛の〈唯物論〉のあいだにある溝に対して、注意を喚起しているのです。(上 pp.593-594)

靈的なものが存在するというアニミズム信念だけでなく、そうした靈的なものが事実存在するというシャーマンの証言は、文明社会においては信憑性を失墜してしまいました。タイラーの言うように「誤った哲学体系」であり、フレーザーの言うように「人を導いて惑わす行為」、見せかけだけの「まやかしの科学」です。一部「オカルト科学」の信者を除いて、いまや信じる者は極めて少ない、否ほとんどいない。

しかし、タイラーが措定した未開—野蛮の段階の社会にさかのぼったらどうか？ 野蛮社会といってもアバウトにすぎますから、ここではミルチャ・エリアーデがシャーマニズムを発見した、少し前の未開—野蛮のシベリアと中央アジアで見えます。

『シャーマニズム——古代的エクスタシー技術』(堀一郎訳、1981、冬樹社)においては、エリアーデは、シャーマンは共同体の精神的統合の役割を担っているのだと言って、シャーマン、シャーマニズムを復活させているのです。

①シャーマンは何をする人か？

「シャーマンはその共同体の精神的統合を防護するのに、不可欠な役割を演じてきた。彼らは何よりもまず悪魔に対抗する騎手である。彼らは病気だけでなく、また黒シャーマンとも闘う。」
「一般的にシャーマニズムは、死、病気、不毛、災難、「暗黒」の世界に対して、生命、健康、多産、「光明」の世界を守るものといひ得よう。」(同上 p.655)

②共同体の中でのシャーマンの役割

「第一に、人間は悪魔や「邪力」にとりまかれた未知の世界に、孤立して存在しているのではないことは確かである。それに、祈り、いけにえを捧げる神々や超自然的存在に加えて、「聖界の専門家」、精霊を「見」、空にあがって神々を神々と会い、地下界に降って魔や病気や死と戦うことができる人々がある。シャーマンの共同体における精神的統合防衛の本質的役割はまったくこれにかかっている。人々は彼らの一人が、眼に見えぬ世界の住人たちによってひき起こされる危機的状況にあって、彼らを救うるとか確信する。その共同体のメンバーの一人が、残りの人々にはかくされ、見ることできぬものを見、超自然的世界から直接にして確実な情報を携えて帰ることができるを知るのは、なぐさめであり、ありがたいことである。」

③死者の世界を豊かなものにする役割

「シャーマンが超自然界に旅し、超人間的存在(神々、魔、死者靈魂など)を見るという彼の能力の結果として、シャーマンは死に関する知識に決定的にあずかることができた。十中八九、

「葬送地理学」の多くの様相は、ある種の死のテーマと同様に、シャーマンのエクスタシー体験の結果もたらされたものである。「要するにシャーマンのエクスタシーの旅の物語が、死者の世界を霊化するのに役立ち、同時にそれを驚くべき形状と人物像でもって豊かなものとする。」(同上 p.556)

エクスタシーとは、訳せば脱魂。シャーマンの魂が肉体を離れて、天上や地下の他界へ、または地平遠くへ出かけることです。「誤った哲学体系」「まやかしの科学」であったシャーマニズムという呪術、その担い手のシャーマンを、この世とあの世のオルガナイザーとして復権させるのに、エクスタシーを以てしたのです。

シャーマンは「医者」「呪術師」「行者」ではあるが、すべての「医者」「呪術師」「行者」がシャーマンたるわけではない。「シャーマンは原始的であると近代的であるとを問わず、すべての医者と同様に病気をなおすものと信じられ、すべての呪術師と同様に、行者風の奇蹟を行なうと信じられている。しかし、シャーマンはそれ以上に靈魂の導き手 (psychopomp) であり、また祈祷師であり、神秘家であり、詩人である。」(同上 p.6)

シャーマンの語を種々の「聖界の専門家たち」(呪医、呪術師、瞑想的な人々、靈感を受けたり憑依されたりする人々、など)のなかから、その共同社会の利益のために如何にしてエクスタシーを行使するかを知っている人たちのだけに限定する、とエリアーデは言っています。逆に言えば、共同社会の利益のためにエクスタシーを行使せず、私的の利益のためにエクスタシーを行使する「聖界の専門家たち」は、シャーマンたる資格がない。

エリアーデの『シャーマニズム』には、「古代的エクスタシー技術」という副題がついています。未開—野蛮のシベリアと中央アジアの社会をフィールドとして、発見された「古代的」な社会の「名もなき宗教」です。その共同社会とは、極めて小規模なフェイス・ツウ・フェイスのコミュニケーションが成り立っている、自然の営みに直接に依存した原始的な社会でしょう。タイラーの言葉で言えば、「低級種族」の社会です。文明—未開—野蛮と遡っていけば、文明の進歩から取り残された未開あるいは野蛮に当たる社会と思われれます。文明社会の中に、シャーマニズムが見られないことはないにしろ、それは未開あるいは野蛮社会の残滓にすぎないでしょう。しかしながら、エリアーデが発見した「古代的エクスタシー技術」は、「古代的」な社会の「名もなき宗教」であり、縄文社会の呪術をイメージするには極めて有効ではないでしょうか？

「エクスタシーは、それが象徴的なものであれ、見せかけだけであれ、真実であれ、いずれにせよ常にトランス (trance 忘我・恍惚・意識喪失の状態) を伴っている。そして、このトランスとは、シャーマンの靈魂がその肉体から一時的に離脱することと解釈されている。エクスタシーの間にシャーマンの魂は天界に上昇し、地下界に下降し、もしくは空間遠く旅立つものと考えられている。シャーマンはこうした神秘的な旅をその入巫儀式 (イニシエーション) を通して、はじめて体験し、その後には、(1)病人の魂をさがすために(空間を、地下界もしくは例外的には天に)、(2)いけにえに動物の魂を天界に運び、神々に供養するために (中央アジア・シベリア)、もしくは天上の神々からの祝福を求めするために (南米)、もしくは志願者に加入礼をほどこすために (オーストラリア)、もしくは月界やその外の天界を訪問するため (エスキモー人)、などの場合行使する。これらの諸例はすべて上昇に関連する。(3)最後に死者の魂を地下界にあるその新しい住居に導いて行くために (靈魂の導き手としてのシャーマンの地獄下り: the descensus ad inferos of the shaman-psychopompos) 行うのである。」(同上 p.xv- xvi)

ここには、縄文の Mgičan の Magic が種明かしされているように思われます。少なくとも、タイラーやフレーザーが「オカルト科学」とか「まやかしの科学」として切って捨てたものの存在理由が真摯に考察されています。縄文人は、このような Mgičan の Magic によって、この世に生き、あの世に再び生きてきたに違いないのです。

(11) 折口信夫が考え抜いた精霊と神

精霊について、日本において最も深く考え抜いたのは民俗学者の折口信夫（1887-1953）だと思われます。彼は、日本におけるアニミズム単純な庶物信仰（フェティシズム）ではなかった、と言っています。

「日本におけるアニミズムは、単純な庶物信仰ではなかった。庶物の精霊に到達する前に、完成しない側の靈魂に考へられた次期の姿であったものと思はれる。植物なり巖石なりが、他界の姿なのである。だが他界身と言ふことができぬほど、人界近くに固着し、残留してゐるのは、完全に他界に居ることの出来ぬ未完成の靈魂なるが故である。つまり、靈化しても、移動することの出来ぬ地物、或は其に近いものになってゐる為に、将来他界身を完成することを約せられた人間を憎み妨げるのである。此が、人間に禍ひするデモン・スピリットに関する諸種信仰の出発点だと思われる。未完の魂は、後来の考へ方で言ふ成仏せぬ靈と同じやうに、崇りするものと言つた性質を持ってゐる。」（『民族史観における他界観念』『折口信夫全集第16巻』pp.314-315）

折口信夫の考えていたところを、彼のノートによって見てみることにしましょう（「精霊と靈魂と」『折口信夫全集ノート編第7巻』、p.533-608）。

低級な神は、スピリットあるいはデモンという語であわわされていて、いわば悪魔風な性質を持っている。これは平安期になると、怨霊、もの、もののけとなる。ものは病気を起こさせることが多く、もののけは、ものの病気で、それを起こすのももののけと言っていた。道端にいる神は二種類あって、低い神と、高い神の零落したものがある。木にも石にも神がある。水の上の神、川の神は河童である。沖縄では、木の中にいるのを、きむじんという。徳川期に頻出した姑獲鳥（うぶめ）は、われわれの幽霊のようなものらしい。家の中には小さな精霊がいる。たてつけの悪いことや、床が鳴ったりすることは、スピリットのすることで、それは小さいものと信じられていた。東北では、「座敷わらし」がいた。「百鬼夜行図」に描かれているのは、だいたい家の中にいる化け物であった。声だけの化け物もある。「こだま」「すだま」、「いきすだま」、「山びこ」。山姥は遊離して出てきた純然たる妖怪で、山男は純然たるお化けである。海にも化け物がいて、舟幽霊は「杓をくれ、杓をくれ」と言うのでやると、水を舟にくみいれて舟をひっくりかえす。

単純化して言うなら、折口信夫は神の世界にも階級があると考えていたのです。

精霊にもものをやるときは、自分より低い神だから、「まつる」とは言わず、「むける」「むく」、「たむく」という。さへの神は、拜まぬ神である。旅行中に、ただ物を与え機嫌をとって通るだけのことである。スピリットは尊敬されていない。

では、低級な神に対して高級な神は、どのようなものか？ 高級な神というものを考えるには、靈魂の宿っているものを神とするという土台から考える必要があるという。

靈魂のはいつているものを、たまという。神を遡ってゆくと、たまになり、たまから神さまという考えに進んでいく。神さまの神さまたる力を留めておくところが石で、たまの所在である石をまつる。根本は、石の中にある靈的な魂の信仰だということです。

「神さまというのは肉体をもたぬお方だとすると、結局、神を靈魂に還元してしまうわけである。」（p.605）

「靈魂が靈魂の力を発揮するためには、人間の肉体に近いものの中に入らねば威力が出てこぬ。だから、どこまでいっても言えることは、昔の人が言うていた神は、たまが人間のからだにはいつて、非常に威力を発揮したものをいうたのであろう。」（p.605）

「靈魂はたまであり、今所謂たましいはもと靈魂の作用である。たまは靈魂であつて、多くの

場合露出せず、ものに内在してゐる。さういふ時、霊をつつんでゐるものをもたまと言ふ。宝石・貝殻又は単なる石をたまといふはその理由である。之がつつまれたものから出る時は、多少とも霊魂としての機能を発しようとしてゐるので、之が人体に入るを通常とする。」

「同様のもので、此信仰が諸物崇拜によって現れたのがものである。之は自由に人身に入り易い性質をもつてゐた。もののけと言へば怨霊の意義に用ゐてゐるが、怨霊によって起こる病気の原因をなすその霊魂の義に用ゐてゐた。」（『霊魂』『折口信夫全集第20巻』、p.211）病気の原因をなす霊魂は、呼び返してしずめる。

では、そのたま、霊魂の来るところは、何処なのか？「ある伝えでは高天原だと考えた。また、ある伝えでは、まったくわからぬところ、すなわち、海原を照らしながらやって来た、と大国主の物語には書いてある。」（『精霊と霊魂と』、p.596）

さらに時代をさかのぼって、『古事記』、『日本書紀』以前の原始においては、どこからやって来たか？

「私の考えるまれびとの原の姿を言えば、神であつた。第一義に於いては古代の村村に、海のあなたから時あつて来たり臨んで、其村人どもの生活を幸福にして還る霊物を意味して居た。」（『国文学の発生（第三稿）』『折口信夫全集第1巻』 p.5）

かの有名なマレビト論に他なりません。マレビト論については、第17回論考において詳論しましたから、最小限の再論のみに止めましょう。

①まれびとは人の扮した神で、来り臨んで、其村人の生活を幸福にして還る霊物である。②にいなめの夜に、神に扮した神人が來訪する。

③大晦日・節分・小正月・立春などに訪れるまれびとは簀笠姿をして居た。

④奥羽地方のなもみはげたか・なまはげなどは年頭の行事として村の家々を歴訪する。

⑤沖繩縣の八重山列島ではまやの神・ともまやの神のが海岸の村に渡り来る。

⑥八重山列島ではまた、赤また、黒またと言ふ怪物が出て来る地方がある。

⑦盂蘭盆には若い衆連の假裝する、祖先の靈、あながまあを迎へて居る。

⑧まれびとの来る時期はいつか？ まづ春の初めに來る。

⑨まれびとは土地の精靈に誓言を迫つて「反閤《ヘンバイ》」を蹈んだ。まれびとは、呪言を以てほかひをすると共に、土地の精靈に誓言を迫つた。更に家屋によつて生ずる禍ひを防ぐ爲に、稜威に満ちた力足「反閤《ヘンバイ》」を蹈んだ。其によつて地靈を抑壓しようとした。まれびとの力強い歩みは、自ら土地の精靈を慍伏させるのであつた。三河北設樂郡の、正月「花祭り」では、まれびと來臨の状を演ずる神樂類似の扮裝行列には、さかきさまと稱する鬼形の者が家々を訪れて、家人をうつ俯しに臥させて、其上を躍り越え、家の中で「へんべをふむ」と言ふ。へんべは言ふ迄もなく反閤《ヘンバイ》である。

⑩まれびとの来る時期は、次に「刈り上げ祭り」である。

⑪まつり。春のほかひに臨むのをまれびとのおとづれの第一次行事と見、秋の奉賽の獻《マツ》り事《ツカ》へが第二次に出來て、春のおとづれと併せ行はれる様になつたものと見られる。私の考へを言ふと、刈り上げ祭りと、新しい年のほかひとは、元は接續して行はれてゐたのである。譬へば、大晦日と元日、十四日年越しと小正月、節分と立春と言つた關係で、前夜から翌朝までの間に、新嘗とほかひとが引き續いて行はれた。まれびとは一度ぎりのおとづれで、一年の行事を果したものであらう。

⑫初春のまれびと。死の常闇の國として畏怖せられて居たのが、其國の住者なる祖先及び眷屬の靈のみが、村の爲に好意を持つて、時あつて來臨するのだから、怖いが併し、感謝すべきおにの居る國といふことになつて、親しみを加へて來る。一方には畏しさの方面にのみ傾いて、すさまじい形相を具へた魔物の來臨する元の國と言ふ風に思ふた處もある。に在るすくは其だ。奥羽

地方のなもみの類の化け物、杵築のぼんない等をはじめとして、おにといふ説の内容推移に従うて、初春のまれびとを悪鬼・羅刹の姿で表してある地方が多い。ところが、其等は年中の農作祝福に来るのである。

ややこしくなったので、低級な神と高級な神の関係を、つづめてみます。

低級な神＝スピリット、デモン。怨霊、もの、もののけ。姑獲鳥（うぶめ）。河童。きむじん。座敷わらし。こだま、すだま、いきすだま。山びこ。舟幽霊。（これらの神は山野に満ちて人間を窺う悪魔風な性質を宿している。）

高級な神＝まれびと。（海のあなたから時あって来たり臨んで、其村人どもの生活を幸福にして還る。）

高級な神と低級な神との関係――

- ①まれびとは土地の精霊に誓言を迫つて「反閤《ヘンバイ》」を踏む。
- ②まれびとは、呪言を以てほかひをすると共に、土地の精霊に誓言を迫る。
- ③稜威に満ちた力足「反閤《ヘンバイ》」を踏む。これによって地霊を抑圧しようとした。「反閤」とは力足を踏むこと。

「まれびとは、呪言を以てほかひをすると共に、土地の精霊に誓言を迫つた。更に家屋によつて生ずる禍ひを防ぐ為に、稜威に満ちた力足を踏んだ。其によつて地霊を抑圧しようとしたのだ。平安朝に於て陰陽道の台頭と共に興り、武家の時代に威力を信ぜられることの深かつた「反閤（ヘンバイ）」は、実は支邦渡来の方式ではなかつた。在来の伝承が、道教将来の方術形式を取りこんだものに過ぎなかつたのだ。一部の「反閤考」は、反閤の支邦渡来説を述べようとして、結局、漢土に原由のないものになることを証明した結果に達して居る。地面すら支邦の文献にないものであるとすれば、我が国固有の方術を言ふ所の、元来は日本語であつたのであらう。字は「反拝」などと書くのを見ても、支邦式に見えて、実は抛り處ない宛て字なることが知れる。まれびとの力強い歩みは、自ら土地の精霊を褶伏させるのであつた。」（「国文学の発生（第三稿）」同上 pp.38-39）

高級な神＝「まれびと」は、古代においては巨人のようなもの＝「鬼」でもありました。花祭神楽のおける鬼、ナマハゲの鬼の面、は、驚くべき力をもって、悪い精霊を追いしりぞけ、人間の復活を助けて、清浄無垢なものに変えそうとして「反閤」を踏んでます。男鹿のナマハゲ、甕島のトシドン、今塚古墳の力士埴輪、そして縄文中期の「仮面の女神」も力強い反閤を踏んでいます。

さて、折口信夫が考え抜いた精霊と神は、これまでです。この続きは、前回の第18回稿で書いてあります。縄文後期から晩期にかけての土偶（ハート形土偶、遮光器土偶など）は、すべての土偶に、反閤する力強い太脚と、力のこもった太腕・爪が認められます。「すべて」というところが肝心です。むつ市二枚橋土偶や金生土偶に至っては2本の角らしきものが生えています。これらの土偶は、折口信夫が考え抜いた精霊と神と無関係とは考え難いでしょう。

